

人工知能学会誌創刊1周年にあたって

福村 晃夫*



学問や技術の発展を志す者が集う、学会の第一の責務は、研究成果の報告と討論、ならびに啓蒙の場を提供することであり、その最も根源的な姿が学会誌の発行であることは、いうまでもないことである。本会が発足したのは昨年7月24日であった。そして、会誌の創刊号ができあがったのが同年の8月の下旬、いわば、学会発足の直後ともいえるほどの時期であった。会の発足を確信し、よほど早くからの編集作業がなくてはこのような芸当はできぬはずであり、しかも会誌はいったん走り出すと止めることができないものである。1年の旅程を終えて、無事1周年記念号を迎えるに至ったことを、皆様ともども祝賀するこの機会を借りて、すでに2年近くも走り続けてこられた編集担当の方々に対し、厚く御礼を申しあげたい。

さる5月の学会の理事会で、昭和63年度より会誌の発行を隔月とすることが確認された。そのようなことができたことの原因は、いつにかかって、会員の増加の見通しの明るさにある。この4月に会員数は2000名を突破し、賛助会員は80社185口という実績となった。今後の努力さえ怠らなければ、おそらく昭和62年度末には会員数は3000名に達することが予想され、財政基盤も固まり、隔月発行に耐えうるだろうとの判断がなされたのである。むろんこのことには、会の運営にあたる人々あげての協力が必要であり、また広くは、会員諸氏の絶大なご支援を仰がなくてはならないので、再びこの場を借りてよろしくお願い申しあげる次第である。

さて筆者は、最近、身体障害を持つ一高校生の作文に接する機会を得た。運動系の疾患はときとして、人間の表現機能の大半を奪い去ってしまうことがある。絵を描き、詩をうたい、文字をつづことは、人間に与えられた最大の喜びである。しかし、言葉には調音運動が伴うから、手足の運動機能の障害が、発話と言語認識の能力を阻害することもあるだろう。情動という言葉があるが、これは急激な動作となって現れる喜びや悲しみを表す言葉である。また、一画、一画文字を作りあげていく手動作の連なりを経て、論理的思考の生成や学習が行われるとも考えられる。したがって、筆記や描画にかかる運動系に障害を持つ者が負うハンディキャップは、われわれにとって計りしれないほど大きなものであるに違いない。

上記の高校生は、小学生の年代になってカナタイプを覚えることができたということである。この装置は、普通の子供にとっては木の切れ端程度の意味しかないかもしれないが、この身障児にとっては素晴らしい知的ツールであったであろう。この少年は、その後間もなくしてワープロに出会うことができ、日本語独特の漢字かなまじりの文章表現力を身につけるようになる。さらに、高校に入るとマイコンがこなせるようになり、Basicのプログラミングを経て、ゲームという知的な遊びを経験することになる。そしていまは、パソコン通信のクラブに入会して、情報コミュニティの一員として楽しみを味わっているということである。

この一高校生にとって、いまのワープロもパソコンも、また通信ネットワークも、その知的生活には絶対欠かせないものとなっているようである。したがって、相対的な見方を許されれば、ハンディキャップのある者にとっていまの情報機器は、すでにAI視できるものとなっているのかもしれない。だが人には絵を描き、詩をうたう喜びがあり、それも、彼の高校生と分かちあいたい。残念ながらいまのAIは、そこまでの能力はまだないであろう。

そもそも人間は、その知的、合理主義的理想からすれば、「正常とは何か」を知らないというハンディキャップを背負っている。AIは、いったいこの問題をどう扱うのだろうか。その点、人間のAI遍歴はいつ果てるのか予想もつかないのだが、本会誌が、真摯なる旅人たちの一里塚となりうることを願ってやまないものである。

* 名古屋大学工学部情報工学科教授